

## 主体的表現「やはり／やっぱり」の成立： 近現代の日本語辞書の意味記述検討を通して

加納 麻衣子

### 1 はじめに

現代日本語の副詞「やはり／やっぱり」については多方面から様々に論じられてきているが、この内、筆者は、この副詞をその一部とする日本語の或る種の語句が話し手の認知・認識の過程を含むとする「含過程構造」説（氏家 1996）に関心を持ち、考察を進めて来た。この副詞の起源的なものは客体的な事態を表現するものであり、それがやがて話し手の認識を表す主体的表現に変化・発展して来る。本稿の目的は、それがどのような過程を経て実現したのかを解明することにある。

現在、英語学の分野で subjectification の研究が盛んである。本稿では、日本語を対象として類似した現象を扱うことになる。この副詞を対象とする限り、こうした現象が単純に処理、説明しきれるものではなく、その過程に様々に解釈できる大きな問題がはらまれていることを明らかにするのが本稿の狙いの一である。

「やはり／やっぱり」は一般的に非母語話者にはわかりにくく、また、同時に異言語に翻訳される際に多くの問題をはらむとされ（氏家 2007）、具体的に日本語小説の英訳においても十分な対応表現が与えられているとは言い難いことが部分的ながら判明している（加納 2011、2012）。これは当該語の客体的表現に関してではなく、後に獲得された、話者の認識を表わす主体的表現に関する場合である。話者の心的なプロセスが十分に理解されないと非母語話者にはわかりにくく、また、母語に置きかえることも難しくなると言えよう。

この主体的表現の成立過程を明らかにすることが、非母語話者にも理解できるような説明を可能にする道を切り拓くのではないか。それにはまず、刊行時における日本語の用法を解説していると考えられる日本語辞書の記述について、次の段階では和英辞書、日本語教育テキスト、関連の辞書・参考書等の記述について検討して行く必要がある。本稿では近現代の日本語辞書におけるこの副詞の意味記述を全3期に分け、特に主体的表現の成立過程を明らかにするために1期、2期を中心に検討を進める。

### 2 分析対象とした近現代の日本語辞書

近現代の日本語辞書で「やはり／やっぱり」はどう記述されているか。そこには当該項目の執筆者、著者、編者、監修者等（以下、必要のない限り併せて「執筆者」とする）が執筆時点でこの表現をどう見聞きし、捉えていたかが反映されていると言えよう。この副詞はもともと客体的表現として始まり、19世紀以降分化を始め、主体的表現（時枝 1953）の機能を獲得したが、その記述は20世紀半ばまでなされていない。そうした中で始まった記述には執筆者の内省や語感の息吹きが感じられる。

こうした視点に立ち、本稿で今回、調査対象としたのは以下の辞書である。調査の

第一段階としての報告になるが、現時点で調べのついた限りでは2012年までに全22種の辞書が刊行されている。刊行年順に書名、編著者名（〔 〕内に奥付に準拠したもの）を記入）、出版社名、総頁数（pp.）を挙げると次のとおりとなる。なお、矢印に続けて本稿で使う予定の各辞書の略称を挙げる。

以下の資料の検討を通し、記述内容についての分類等の基本的枠組みを作り、また、今後、新たな資料を加えることにより必要に応じて修正を施したい。

記述内容から、客体的表現のみを対象とする1940年代までの50年を第1期、主体的表現の扱われ始めた1950年代以降、それが或る程度の発展に至った1970年代末までの30年を第2期、1979年以降、現在に至る30年を主体的表現についての記述が分化、固定して行く時期として第3期とする。本稿では特に客体的表現についての記述が一定の域に達したと見られる第1期、また、主体的表現の記述が一定の発展に至った第2期に焦点を当てて考察することにする。

### 第1期

- 1 1899年（和装第四巻は1898年）『日本大辞典ことばの泉』合本 落合直文〔著者〕大倉書店 1776pp. →『ことばの泉』
- 2 1904年『言海』大槻文彦〔著者〕六合館 1110pp. →『言海』
- 3 1919年『大日本国語辞典』四巻（全4巻）上田萬年・松井簡治〔著作者〕富山房、金港堂書籍株 刊 1642pp.（なお、1966年『修訂大日本国語辞典新装版』上田萬年・松井簡治〔著作者〕富山房もこの語に関し同内容であるため、両者を同一のものとして扱う）→『大日国語』
- 4 1932年『日本大辞典改修言泉』第五巻（全5巻）落合直文〔著作者〕芳賀矢一〔改修者〕大倉書店 5154pp. →『言泉』
- 5 1935年『大言海』故大槻文彦〔著者〕大槻茂〔相続者〕富山房 2254pp. →『大言海』
- 6 1936年『大辞典 下巻』下中邦彦〔編者〕平凡社 4209pp. →『大辞典』
- 7 1949年『言林』新村出〔編者〕全国書房 2470pp. →『言林』

### 第2期

- 8 1954年『辞海 縮刷版』金田一京介〔編集〕三省堂 1974pp. →『辞海』
- 9a 1955年『広辞苑』初版 新村出〔編集者〕岩波書店 2359pp. →『広辞苑』
- 10 1963年（2月）『大日本国書国語辞典』岩淵悦太郎〔編者〕大日本図書 879pp. →『大日国書』
- 11a 1963年『岩波国語辞典』初版 西尾実 岩淵悦太郎〔編者〕岩波書店 1112pp. →『岩波国語』
- 12 1967年『三省堂 新国語中辞典』三省堂編集所〔編者〕三省堂 2231pp. →『三省堂新中』
- 13 1972年『講談社 国語辞典 改訂増補版』（初版：1966）久松潜一・林大・阪倉篤義〔監修〕講談社 1253pp. →『講談改増』
- 14a 1972年『新明解国語辞典』初版 金田一京介 金田一春彦 見坊豪紀 柴田武 山田忠雄：主幹〔編集〕三省堂 1239pp（なお第三版1981まで同内容であるため、両者を同一のものとして扱う） →『新明解』
- 15 1973年『角川国語中辞典』時枝誠記 吉田精一〔編者〕角川書店 2397pp.（なお、1988年『角川国語大辞典』時枝誠記 吉田精一〔編集者〕角川書店もこの語に関し同内容であるため、両者を同一のものとして扱う） →『角川国語』

- 16a 1976年『日本国語大辞典』第19巻初版(全20巻) 日本大辞典刊行会[編集]小学館709pp.  
→『日国』
- 9b 1976年『広辞苑』第2版 新村出[編集者] 岩波書店2448pp.
- 17 1978年『学研国語大辞典』初版 金田一春彦 池田弥三郎[編者] 学習研究社2270pp。(なお、第2版(1988)まで同内容であるため、両者を同一のものとして扱う) →『学研国語』
- 第3期
- 11b 1979年『岩波国語辞典』第3版 西尾実 岩淵悦太郎 水谷静夫[編者] 岩波書店1216pp。(なお、第7版2009まで同内容であるためこれら5辞書を同一のものとして扱う)
- 18 1981年『国語大辞典』尚学図書[編集] 小学館2624pp。(なお、『国語大辞典 言泉』1986は18から文献付き用例部分を削除したものであるため、両者を同一のものとして扱う)  
→『国大辞典』
- 9c 1983年『広辞苑』第3版 新村出[編集者] 岩波書店2669pp.
- 19a 1988年『大辞林』初版 松村明[編者] 三省堂1988pp。(なお、第二版(1995)まで同内容であるため、両者を同一のものとして扱う) →『大辞林』
- 20a 1989年『講談社カラー版日本語大辞典』梅棹忠夫 金田一春彦 阪倉篤義 日野原重明[監修] 講談社2302pp. →『講談カラ大』
- 9d 1991年『広辞苑』第4版 新村出[編集者] 岩波書店858pp.
- 21 1995年『大辞泉』松村明[監修] 小学館2912pp. →『大泉』
- 20b 1995年『講談社カラー版日本語大辞典』第二版 梅棹忠夫 金田一春彦 阪倉篤義 日野原重明[監修] 講談社2542pp.
- 14b 1997年『新明解国語辞典』第五版 柴田武 山田明雄 酒井憲二 山田忠雄[編集] 三省堂1557pp.
- 9e 1998年『広辞苑』第5版 新村出[編集者] 岩波書店2988pp.
- 16b 2002年『日本国語大辞典』第13巻第2版(全13巻) 日本国語大辞典第二版編集委員会 小学館 国語大辞典編集部[編者] 小学館1421pp.
- 22a 2002年『明鏡 国語辞典』初版 北原保雄 大修館書店[編者] 1813pp. →『明鏡』
- 14b 2004年『新明解国語辞典』第五版 柴田武 山田明雄 酒井憲二 山田忠雄[編集] 三省堂1557pp.
- 14c 2005年『新明解国語辞典』第六版 山田忠雄 柴田武 酒井憲二 倉持保男 山田明雄[編者] 三省堂1651pp。(なお、第七版(2012)まで同内容であるため、両者を同一のものとして扱う)
- 19b 2006年『大辞林』第三版 松村明[編者] 三省堂2754pp.
- 9f 2008年『広辞苑』第6版 新村出[編集者] 岩波書店3049pp.
- 22b 2010年『明鏡 国語辞典』第2版 北原保雄[編者] 大修館書店 pp.1935

付言すると、第3節でA型として詳しく見るように、1950年代までのものは近世までの日本語辞書の記述を引き継ぐと見られる。また、特にC型の現れる、その後の記述に関しては近代以降発達した和英辞書の記述、また、現代に入ってから日本語学習者用の教科書や参考書類に記載された内容と相互に参照し合う要素が認められる。この相互関係の具体的内容の調査により明らかになることは大きいと思われ、本稿はそれに向けての基礎固めともなることを目指している。

なお、2001年に次の辞書が刊行されているが、これについては出版当時の記述内

容ではないことから、今回の調査目的に即したものではないと判断し、取り上げない。

2001年『時代別国語大辞典』室町時代語編 室町時代語辞典編修委員会[編者] 土井忠生[代表者]  
三省堂 891pp.

### 3 客体的表現「静止・不動」型から「不変・依然」型へ

前節で見た各辞書において「やはり／やっぱり」はどう記述されているだろうか。そこに現れた意味を全体的に把握しつつ、そこから、「やはり／やっぱり」の意味記述とその変化の実態を明らかにしたい。

各辞書の記述を検討することにより、いくつかの意味範疇が見出された。大きく見ればそれは客体的事態の表現と主体的な認識の表現に分かれる。「やはり／やっぱり」は元来、「今或る状態を動かさずに(いる)」という概念内容を示す語(時枝 1941/2007)として客体的表現(時枝 1953)であり、客体的な事態を表現していた。その具体的内容とその後に起きる変化とを辞書刊行の時代に即して第1期から見て行く。

説明の便宜上、以下に名称を付して、大まかな枠組みを示す。

A「静止・不動」、B「不変・依然」: B1「前と同じ」、B2「他と同じ」

C1「伝聞・予想との一致」、C2「既成の観念・事実への復帰」

まず、純粋に客体的な状態を示すものとしてA型、続いてそこから分化したB型が挙げられ、そのB型からさらに分化したものとして第4節で扱うC(C1、C2)型が挙げられる。B型はA型を引き継ぎつつC型への橋渡しの役目をしたと位置付けられる。

#### 3.1 「前と同じ」(B1)の優勢

まず、1899年から1940年代までの第1期(約50年間)を中心に検討する。ここで扱う資料は7種類の辞書である。奥付に1から5までは「著者」、「著作者」という語があり、「編者」「編(集)者」という語は1936年の6から始まる。第1期ではこれら同じ「著者、編者」によるものは1と4、2と5、それぞれ落合直文、大槻文彦である。ただし、4には改修者として芳賀矢一が入る。なお、第1期では「やはり」という項目で挙げられているが、言い換えの語として「やっぱり」が挙げられている。そのため、本稿では「やはり／やっぱり」という表記法で通す。

順次、1から7までを追うことにする。

1『ことばの泉』(1899) そのままにて。もとのままにて。

例文が挙がっていないという弱点があるが、「そのままにて」「もとのままにて」と「にて」があることに注目すると、「在る」に関連する意味の語を修飾する語句と解される。ここから、「やはり／やっぱり」は「静止」を中心とし、「静止・不動」の幅を持つ意と解される。これをA型とする。

2『言海』(1904) ソノママニテ。故ノ姿ニテ。ナホ。依然。

この意味記述としての前二者(A型)に続いて挙げられた「ナホ」「依然」は1935年の同著者による『大言海』で第2項として明確に分類された形で挙げられているが、

この時点ではこれらが分類されことなく記載されている。「説明」として使われた「ナホ」「依然」は言わば言い換えの語句だが、B型「不変・依然」の意を示すものが記載された最初の例と見ることができる。なお、後に見るようにB型に2種類のものが見出されるため、これをB1とする。そこで、ここにはA、B1型が挙げることになる。また、『ことばの泉』同様、例文は挙げっていない。

3『大日國語』(1919) もとのまま。在来の通り。なお。

用例が示された最初のもので、文献からのものである。被修飾語は動詞「(笠を)召す」「吸はす」となっている。ここから、『ことばの泉』の「もとのままにて」という「にて」を伴う語句とは異なり、「今まで(もと)の通り(に)」の意であることが判明。『言海』の「ナホ」と同じく、「不変・依然」の意を示すB1型に入る。

4『言泉』1932 元よりの様に。なほ。

1の『ことばの泉』と同じ著作者によるが、改修者・芳賀矢一が入るためか記述は異なる。『大日國語』に準じ、B型の記述のみになっている。文献から2用例が挙げられているが、この内、1例は『大日國語』での「(笠を)召す」を引き継ぐものである。

5『大言海』1935 1ソノママニテ。故(モト)ノ姿ニテ。2ナホ。依然。

『言海』と同著者によるものである。ここで初めて2項に分かれての記述が登場する。『ことばの泉』をほぼ踏襲しての第1項(A型)と、『言海』・『大日國語』・『言泉』と続く「ナホ」に、『言海』・『大日國語』を引き継いだ「依然」が載る。実はここから、『言海』で述べたように、「ナホ」「依然」をB(B1)型とし、これに基づき、既に本稿で使用しているA型、B(B1)型の名称を設けた次第である。それぞれに文献からの用例が挙げられている。A型の用例における被修飾語は動詞「居る」、B1は「召す」である。

6『大辞典』1936

1 静止するさま。動かぬさま。ちっと。2 なほ。依然。もとのまま。前と同様に。

『大言海』と同様、2項に分かれる。第1項がA型、第2項がB1である。また、それぞれに文献からの用例が、A型のものとして初出2例が挙げられ、被修飾語は動詞「居る」「置く」。B1型としての2用例は『大日國語』の2例を踏襲。

ここで、B型に関して「前と同様に」という語句があることに注目したい。B型に関してはここまで説明と言うよりは鈴木(1973)の言う「置き換え(循環)方式」(ここで言えば「なほ」「依然」に言い換える)に終始していた。「依然」は『大言海』と共にここでも使われている。しかし、それが単なる時間の継続としての把握を示すのに対し、「前と同様に」は今という発話の時点での意識に基づき、それを時間的に「前」の状態と比較するということが明確化されているという違いがあると言える。

7『言林』(1949) もとのまま。

こうあるだけで、B1型のみ記述である。例文は挙げっていない。

以上、1～7の辞書を検討した。なお、先に触れたようにここまでのすべての辞書で「やはり」という項目内に「やっぱり」が挙げられている。言わば言い換えの語として、多くの語を列挙した中にあり、この時代までの辞書の記述に言い換えが多くな

れたことが明らかである。

ここまでは1899～1949年までに見られた記述である。これを概観すると、「やはり」はA型「静止・不動」とB型「不変・依然」との記述に終始し、また、この内、B型「不変・依然」が優勢であることがわかる。つまり、1辞書のみがA型だけを、3辞書がA、B型双方を掲載、3辞書がB型のみを掲載している。ここから、当時の執筆者達にB型の意が強く意識されていたことがわかる。下に見る現時点の辞書で最も古いと見られる例文出典から見ると、A型が始原の形であることは明らかであり、また、これが現在では全く使われていないことも事実である。第1期におけるB型の優勢から考えると、既に20世紀前半まででA型が使用されていなかったことが判明する。

A型：1462年 百丈清規抄 五「面をばやはり置いて手をあちこちするは悪いぞ」

B型：16C末～17C初 虎寛本狂言・膏葉煉〔室町末～近世初〕「扱どこに付て吸はするぞ」「やはり先祖のおほちの通り拇のはらに付て吸はせう」

(出典は年代が明らかなどころから、1976『日国』初版に2002同第2版を加えたものによる。)

ここで、「やはり／やっぱり」の文献からの用例について触れる。客体的表現A型とそこから分化したB型とに限定すると、用例の挙がっているのは辞書3、4、5、6のみで、全11例であるが、同じ用例も使われているため全7種となっている。

以上、第1期ではA型よりも、B(B1)型の優勢が維持されていることを確認した。

### 3.2 「他と同じ」(B2)の台頭

注目すべきはB型についての記述に現れる変化である。「やはり」の説明として1936年の「前と同様に」に続いて現れるものは「他と同じように」であり、1967年の『三省堂新中』に見られる。そこで、「前と同じように」をB1としたのに対し、これをB2としよう。B1と異なり、B2では発話時の意識に基づき、他のものとの比較を明確化したという指摘ができよう。「不変・依然」の意を表わすB型の記述がこうして細分化してきたことがわかる。

続く第2期を見ることで、第1期後の流れを把握しよう。

8『辞海』1954 1もとのまま。依然。「お宅は\_\_\_もとの所ですか」

ここでは2項に分かれ、第1項にB1型のみが挙がり、それまでのものを踏襲した単純な言い換えに終始している。例文は第1項から作例のみが挙げられているが、作例の登場は日本語辞書初である。第2項には次節で見るとようにC型が挙がり、旧来のものとは大分趣を異にしてくる。

9『広辞苑』1955 もとのまま。前と同様に。なお。

『言林』と同じ編者による辞書で、B1型のみ記述である。『大辞典』(1936)で登場した「前と同様に」という語句の言い換えが引き継がれている。例文は挙がっていない。

10『大日図書』1963 1 前と同じように。「今でも\_\_\_安月給になやんでいる」

3項に分かれる記載の第1項にB1型が挙げられている。『辞海』同様、作例が挙げられている。

11『岩波国語』1963 前と同様に。予想どおりに。

B1型とC型が項目として分類されることなく併せて記載される。例文はない。

12 『三省堂新中』1967 1前と同じように。もとのまま。2他と同じように。また。

これはB2「他と同じように」の記述の最初のものである。特にこれが第1項(B1)の中にはなく、別に第2項として立項されているところに注目したい。上述のとおり、「不変・依然」の意を表わすB型がB1の発話時点の時間意識に基づくものから分化し、個物の異同への着目というB2へと延長拡大してきたことが示されている。

13 『講談改増』1972 1もとのまま。同じように。

B1型のみ記述である。

14a 『新明解』初版1972 1(何かしてみたものの)結果が・以前(他の場合)と同じである様子。

「彼に聞いてみたが一分からなかった・私たちも一反対だ・おかしい」

全3項。独特の言い回しで知られる辞書であるが、客体的事態の記述かと思われるものを挙げると、第1項が形式上は『三省堂新中』を継ぎ、B1とB2を併せて挙げたものとも見える。ただし、(何かしてみた「もの」の)という部分が(何かしてみた「こと」の)とどう違うのか、「～し(てみ)たもの」のという慣用句と解釈された場合、主体的表現の説明をしているという理解も成立するなどいくつか問題が残る。「様子」であるから客体的事態には違いないはずだが、第4節で見るとおり、日本語辞書記述のこの段階では主体的表現にもこの語が使われている。第6版(2005)でこの項に関して大幅な修正を施していることも考慮に入れ、判断保留としておく。

15 『角川国語』1973 1以前に変わらないさま。もとのまま。「お住まいは—東京ですか」 2他もの変わらないさま。他と同じさま。「わたしも—反対です」

全4項中、第1、第2項目にB1とB2が別項目として挙げられている。『三省堂新中』を継承したB2の立項は第2期の範囲でこの辞書のみである。他に例文や言い回しの工夫がある。

16a 『日国』1976 1動かさないで、そのままにしておくさま、静かにじっとしているさまを表わす語。2事態・状況が変化していないさま、同じであるさまを表わす語。依然として。

大辞典として多数の文献からの用例が収集されており、そこから帰納したと思われる記述は全4項から成る。第1項はA型を示し、第2項はB1を示すと解される。

9b 『広辞苑』第2版1976 1もとのまま。前と同様に。

全2項から成り、第1項にB1型が挙げられている。

17 『学研国語』1978 1以前と同様に。また、他と同様に。そのまま。「津村の親戚も亦昆布姓を名のり、\_\_\_製紙を業としていて〈谷崎・吉野葛〉

全3項から成り、第1項にB1、B2型が併せて載り、また、近代小説からの例文が挙げられている。

以上、辞書8～17までの10種中、B1型のみ挙げられているものが6種(8、9a・b、10、11、13、16)であり、この内、16はやや不明確ながらB1型に分類されるべきものと判断される。B1、B2双方の挙げられているものが3種(『三省堂新中』、『角川国語』、『学研国語』)あり、この内、それぞれを別に立項したものが前二者(2種)となっている。第1期と比べると、B2型の記述が伸びてきたことがわかる。A型→B1型→B2型という移行、拡大が見られるとしてよいのではないか。

なお、B2の記述について範囲を広げて見たところ、第3期での立項は『岩波国語』第3版(1979)、『講談カラ大』(1989)に限られ、B1と併せての記述は『大辞泉』(1995)、『広辞苑』第6版(2008)のみである。限定された執筆者にしか着目されていないことがわかる。このB2への注目がC型の記述の選択や内容に関わるか否かについても関心を持って行きたい。

#### 4 主体的表現への分化：「伝聞・予想との一致」型の登場

A型に続いてB型、その中でもB1からB2へと意味内容が拡大して来たことを上記で見た。A型は「今或る状態を動かさずに(いる)」という概念内容を示す語として客体的表現であり、客体的な事態を表現している。Ujiiie(2012)ではB型はA型を引き継ぎつつC型への橋渡しの役をしていると位置付ける。B1はA型の概念内容(意味)を濃厚に残しつつも、話者の発話時の意識「前と同じ」を加味するところまで移動し、B2ではそれが時間から空間的なものの意識を加味するところまで移っていることが看取され、こうした移行につれてA型の概念内容は希薄になっているという。これはいわゆる意味の「漂白化」(秋元2002)とされるものの一種である。

第2期に刊行された辞書の調査からB型への変化拡大の延長として新たなものが出現したことが判明する。それは主体の認識を表現するという特徴を持つ。現在、英語学の分野でsubjectification(主体化、主観化の両訳あり)の研究が盛んである。そこで、既に20世紀半ばに成立している時枝誠記の「主体的表現」が認知言語学の分野で注目を集めるようになった。澤田(2011)ではsubjectivityを「主体性」と「主観性」に分け、時枝(1941/2007)とLangacker(2006)の類似性を指摘している。しかし、日本語と英語という言語の違いがここでどう考慮されるべきかについては今後の議論が必要となろう。「やはり/やっぱり」を対象として前節から類似した現象を追って来た限りでは、この現象には客体的表現→主体的表現の過渡期において単純に処理、説明しきれない、様々に解釈できる問題が認められると言えよう。これが言語の違いにより異なるものか否かについて、今後、考察する際の資料となればここでの検討の意義は増すものと思われる。

調査の現時点では、第2期になり主体的表現に分類される記述が最初に登場する。順次見て行くことにしよう。

#### 8『辞海』1954 2思った通り。案の定。「\_\_\_そうだ」

全2項中、第1項(B1)に続くものとして出現している。主体的表現に分類できる内容の最初の記述の登場である。単純な形だが、単語による置き換えではなく、言い換えの語句が使われている。単語による置き換えが不可能な内容だということでもある。概念内容を示すものではないから記述が難しい。また、「意志」とか「希望」という既成の漢語が使えるような内容でもない。なお、この辞書は近現代の日本語辞書で初めて、用例に文献からのものでなく、作例を挙げたものと見られる。

#### 9a『広辞苑』初版1955 もとのまま。前と同様に。なお。

『言林』と同じ編者による辞書で、B1のみの記述で、C型についての言及はない。『大辞典』(1936)で登場した「前と同様に」という語句の言い換えが引き継がれている。



例文は挙がっていない。

10 「大日図書」1963 2 聞いたり予想したりしたとおり。案の定。「聞いたとおり、\_\_\_\_つまらなかつた」「\_\_\_\_そうだったのか」

(3 当然のことながら。結局。「利口そうでも\_\_\_\_子どもは子どもだ」)

[注: 後の文章で扱う際の便宜上、第2項での例文を順次、例文1、2とする]

やっぱり: 「やはり」を強めた語。

全3項。『辞海』と同様、第1項(B1)に続き、また、作例を挙げている。注目したいのは主体的表現の範疇に入り得るものが第2項、第3項の2項にわたって挙げられている点である。A型とB2が挙げられることなく主体的表現と解釈されるものが詳細に挙がっている。既にこの時期までに主体的表現「やはり／やっぱり」が多くの人々に様々な意味合いで使われていたと推測できる。また、記述内容と例文の挙げ方から『辞海』刊行後に十分時間をかけて検討したことが窺われる。

この第2項を「伝聞・予想との一致」としてC1とし、第3項(C2)についての考察は紙幅等の関係で次の機会に譲る。『辞海』の「思った(通り)」に比べ、ここでは「聞く」「予想する」という具体性を持つ表現になっている。「聞いたり予想したりしたとおり」は「聞いたり予想したりしたのと同じように」と言い換えればさらにわかり易くなるが、B型の「(前)と同じように」、「(他)と同じように」と重なる部分を持ち、ここからの移行であることが明白に見て取れる。B型でB1が時間的、B2で空間的(個物)異同に着目していたものが、その範囲を拡大し、話者の心的なものに移ったことがわかる記述である。

例文1「聞いたとおり、やはりつまらなかつた」という表現からは「つまらなかつた」の何と同じであったのかが見て取れる。一方、例文2「やはりそうだったのか」には何と同じだったのかは表明されていない。「そうだった」の部分が話者の心内で確定していることが「の」の存在で明らか(Ujiié 2011)な例文を使っていることが注目される。それでも母語話者が聞き手なら発話の状況や文脈の中で、何と同じだったのかは容易に推測できるが非母語話者には難しいものとなる。Ujiié (2012)ではこれを例文1型からの発展形態として「独立型」と名付け、既に『辞海』刊行時以前にC1がここまで使われていたと指摘する。

11a 『岩波国語』1963 前と同様に。予想どおりに。

B1とC1が併せて記載されているのみである。これは『大日図書』と同年の刊行、しかも、編者も部分的に重複している。同年ということで、ほぼ同時並行で刊行への道を通ったと見るべきであろう。例文はない。『大日図書』より総頁数は多いが、当該語の記述はこれのみである。しかし、『辞海』で登場したC型自体は継承、記載されている。

12 『三省堂新中』1967 4 思ったとおり。違うかと思ったが、違いはなかつたさま。「一想像していたような人だった」

全4項中、B1、B2がそれぞれ立項され、第3項にはC2が挙げられている。第4項は「思ったとおり」に加えて補足したと思われる説明を続けている。これが「さま」で結んだ説明となっている点について後ほど触れたい。例文は前者の例であろう。

13 『講談社国語改増』1972 2 思ったとおり。

全3項で、第1項(B1)に続くもの。

14a 『新明解』初版1972 3 期待される所を裏切らない様子。「—あなただったの・—名人のやることは違う」

全3項。この辞書は前節で触れたとおり特異なものであり、この第3項も異色だが、「様子」としている点について後ほど触れる。

15 『角川国語』1973 3 予想どおり。思ったとおり。案の定。「うまく行くかしらと思ったのに、—だめだった」

全4項中、B1、B2がそれぞれ立項され、第3項は語句の言い換えとなっている。

16a 『日国』初版1976 3 予期した通りの事態であるさま、順当な事態であるさまを表わす語。「やはりすばらしい絵だ」「息子もやはり医者だ」

全4項中、A、B1がそれぞれ立項されるのに続く。「～の／～な事態であるさまを表わす語」という形式は第1、2項のA、B型の説明と同じものである。「事態」、「さま」とあり、客体的な事態の表現と把握していることが看取される。これは他の多くの辞書で「予期した通り」型の言い換えによって話者の認識であることが表現されたものとは異なる。「順当な事態」と言えば客体的な事態に関することと受け取れよう。例文も併せて考えると、「予期した通りの事態」を言い換えたものが「順当な事態」とも取れそうだが、いずれにしてもここからは「予期する」人、「順当だ」と判断する人が、あるいは、「予期する」行為、判断する作用が消え去る。これが「予期した通り」という言い換えに徹する他の辞書の記述と異なる点である。

9b 『広辞苑』第2版1978 2 思ったとおりに。案の定。

全2項。第1項(B2)に続き、C1が簡単に記載されている。

17 『学研国語』1978 2 予想どおり。思ったとおり。案の定。「結果は一だめでした」

全3項中、第1項にB1とB2が併せて挙げられているのに続く。

以上、第2期の11点の辞書の意味記述を見て来た。第1期では全く見られなかったC型、C1が、『広辞苑』初版1955を除く10点の辞書に見られることが判明した。言い換えの語句として「案の定」が5点の辞書で見られた。説明で使われた動詞部分については複数回の使用も併せると、「思った」5、「予想(した)」3、「聞いた」1、「予期した」1、その他2(『三省堂新中』、『新明解』)となっている。また、それらの動詞の後に「とおり(に)」でなく、「さま」、「様子」を使って記述したものはそれぞれ2(『三省堂新中』、『日国』)、1(『新明解』)であり、この記述法は少なくとも第2期の範囲内では継承されていないと見られる。

## 5 結び

本稿では「やはり／やっぱり」について近現代の日本語辞書22点の記述を調査・検討した。その記述の内容から、もともとは客体的事態の表現(A型)だったものが話者の認識を表わす主体的表現(C型)へと分化発展してゆく過程を追った。19世紀末からの約50年を第1期、1950年代から1970年代末までの約30年を第2期、

1979年以降、現在に至る約30年間を第3期とし、A型からC型への分化の過程に焦点を当てるために第1期、第2期を中心に検討した。その結果、A型からC型への橋渡しとなるB型において、「静止・不動」の意を表わすA型の記述は第1期では決して盛んではなく、「不変・依然」の意のB型の内、B1「前と同じ」が優勢であることが判明した。B2「他と同じ」は第2期に台頭して来るが、一部の執筆者の注目のみに留まった。

このB型の分化が進むにつれてA型の概念内容は薄れて行き、やがて話者の認識を表わす主体的表現であるC型の登場となる。C1「伝聞・予想との一致」は1950年代に記述が始まる。C型については概念内容を持たない認識作用をどう表現するかに問題があり、他の語句での言い換えや単語の置き換え、例文の力を借りるなどしていることが多い。次の段階では、B型から直接移行したと見られるものの、総じて分析が不十分で記述が混迷状態にあるC2について、第3期の記述も参考にしつつ、併せて検討し、C型の全体像をつかむことを目的に考察を進めたいと考える。

## 参考文献

- 秋元実治 (2002) 『文法化とイディオム化』 ひつじ書房
- 氏家洋子 (1996) 「日本語の含過程構造」『言語文化学の視点：「言わない」社会と言葉の力』 第Ⅱ部第3章 おうふう pp. 95 - 113.
- 氏家洋子 (2007) 「日本人はなぜ『やっぱり』を多用するのか」小池清治・氏家洋子・秋元美晴『日本語教育探究法』 第14章 朝倉書店 pp. 112 - 123.
- 加納麻衣子 (2011) 「『やっぱり』と ‘after all’ : 日本語の主体的表現と英語対応表現の示す認識」『清心語文』 No.13 ノートルダム清心女子大学日本語日本文学会 pp.89-102.
- 加納麻衣子 (2012) 「『やっぱり』の対応表現としての ‘of course’ についての考察」『Immaculate』 No.16 ノートルダム清心女子大学英語英米文学研究会 pp.1-11.
- 澤田治美 (2010) 「『主観性と主体性』序論」澤田治美編『主観性と主体性』 ひつじ書房 pp.iii-xl.
- 鈴木孝夫 (1973) 『ことばと文化』 岩波書店
- 時枝誠記 (1941/2007) 『国語学原論』 岩波書店
- 時枝誠記 (1953) 「言語における主体的なもの」『金田一博士古希記念 言語民族論叢』 (1989 現代国語教育論集成編集委員会編 浜本純逸編集・解説『現代国語教育論集成時枝誠記』 明治書院所収)
- Langacker, R. W. (2006) Subjectification, Grammaticalization, and Conceptual Archetypes. In Athanasiadou, A. et all (eds.) *Subjectification: Various Paths to Subjectivity*. Mouton de Gruyter, pp.17-40.
- Ujiiie, Y. (2011) ‘A Speaker’s Cognition Encoded in “No da” Sentences in Japanese’, Paper presented at 13th International Conference of European Association for Japanese Studies, University of Tallinn, Estonia, *Abstracts of 13 EAJS*.
- Ujiiie, Y. (2012) ‘The difference of epistemic contents of Japanese subjective

word yappari and its English equivalents', Paper prepared for 6th Lodz Symposium: New Development of Linguistic Pragmatics 2012, University of Lotz, Poland, *Book of Abstracts NDLP2012*, pp.149-150.

(かのう まいこ・大学院博士後期課程3年)